

氷雪歩行時のアックス打ち替えのタイミングについて

松本 憲 親

はじめに

登山研修No.12において筆者は雪面の斜登降時「谷足が前に出ている時にアックスを打ち替える」と述べたが、これには異論が多いというよりも、ある場合はそうだとするのも含めて筆者と同意見の講師はむしろ少数派である。筆者も十分な検討を加えたいうえで結論づけたというものでなく、多に反省しているのであるが、通説の「山足が前に出ているときにアックスを打ち替える」のも釈然としない点が多々あるので再度の検討を試みた。

文献調査

雪面のトラヴァースあるいは斜登高時の安定した足運びは谷足が後ろで、山足が前に出ているときというのが主流の意見です。1.「高みへのステップ」(文部省)、2.「アイスクライミング」(ショイナード、坂下直枝訳)および3. Mountaineering, 6th Edit.がこの記述をしている。1では何故このときバランスがとれているのかの説明がない。2の62~63ページでは斜登高時山足が前に出たときは両足荷重だからポジション オブ バランスであり、谷足が前になったときは未だ山足に体重が乗っているのでアウト オブ バランスだとしている。この記述は理解に苦しむ。山足でも出した当初は後足である谷足に体重が残っているので両足荷重になっていない。谷足を出した次の瞬間には両足荷重に移行するので、両足荷重=ポジション オブ バランスだとするならこの時もそれであると言える。すなわち、どちらの足が前に出ても、両足荷重ならポジション オブ バランスであるとショイナードは言うべきだ。掲載されている写真と説明が食い違っており、本文が正しいなら写真の説明は逆になる。つづいて方向転換について述べているところも理解に苦しむ。「まずポジション オブ バランスからピッケルを上方やや後ろへ差し込み、それをつかんで支点とする。次に谷側の足を動かし、山側の足が新しい方向へ踏み出せるよう、体が斜面に対向するように足の位置を決める。体は完全に斜面に真正面に向きがに股で立っていることになる。…」とあるが、要するにポジション オブ バランスから谷足を動かして山向きのがに股立ちになると言っている訳です。この表現は2点で間違っている。第1点はアックスを上方やや後ろに刺して谷足を出せばアックスはずっと後ろに行ってしまうと支点としての効果は半減する。第2点は山足を踏み出さねば山向きになれないことです。この点本文が踏み出せるようとしているところを踏み出してと読み替えればよいことではある。原著 Climbing Ice, Ivon Chouinard, SIERRA CLUB BOOKS, 1978. を読んでみると、「アイスクライミング」のポジション オブ バランスとアウト オブ バランスの説明は同じであるが、写真の説明はやはり誤植でした。方向転換に関しての説明は「From the balance position, place the axe high and

3. 論文

slightly to the rear and hang on to it for support. The outside foot takes another step, and the body turns to face the slope as the inside foot makes a step in the new direction. You are now facing the slope with feet splayed apart.」ここに書いてあるのは、バランス ポジション (山足前) で、アックスを山側のやや後ろに打ち込み、補助のためにこれをしっかり掴む。外足を踏みだし、次に内足を新しい方向に踏み出すとき山向きになる。今貴方はがに股に開いた足で斜面を向いているというものである。「アイスクライミング」の当該箇所を踏み出してと読み替えねばならないことが分かったが、前述のようにポジション オブ バランスでアックスを上方やや後ろに打って、谷側の足を先に出すという記述はおかしい。アックスは上方やや前 (通常の位置) に打たれねばならない。この点 クランボンでの方向転換の記述は明快である。2の88ページでは「... 谷側の足の爪先をいくぶん上に向けて山側の足とほぼ同じ高さに置き、ポジション オブ バランスにする。次に山側の足を新しい方向に向ける。そして...」。念のため「Climbing Ice」も読んでみたが翻訳と矛盾しなかった。Ice World, Jeff Lowe, The Mountaineers, 1996. (文献4) 125ページには、クランボン装着の斜め登高時の方向転換を「When it is time to change direction, make a step with the toes pointing slightly uphill, as if you were stepping into the out-of-balance position. But now instead of crossing the trailing foot over the lead foot, simply spray the hind foot in the new direction.」すなわち方向転換時(ポジション オブ バランスから)まるでアウト オブ バランス ポジションに踏み出しているかのように爪先をわずかに上向きに足を出し、この前に出した足の後ろになる足をクロスするのでなく、後ろ脚を単純に新しい方向へがに股に開く、と述べている。このようにクランボンでの方向転換は問題にすべきところはポジション オブ バランスの定義だけだ。「Mountaineering」(3)の279ページではキックステップの斜め登行時山足が前にある状態が安定した姿勢だとしているが、その理由は述べていない。ただその状態では谷足荷重だとあるので2の両足荷重説と正反対である。ジェフ ロウも山足が前の時がポジション オブ バランスであるように記述しているが、その理由を明らかにしていないし、ポジション オブ バランスの言葉を何の説明もなしに使っているのは無神経の誇りを免れない。2と3で少なくとも両足荷重と片足荷重の違いがあるのにである。

一歩毎にアックスを打ち替える説

この本(4)の114ページには「Unroped snow climbing is often safe, with the expectation that the support of the axe shaft, shoved as deeply as possible into the snow as a self belay before each step,... とある。2歩毎のポジション オブ バランスの時にアックスを打ち替えるのではなく、each stepとあるから1歩毎に打ち替えると述べているようだ。124~125ページには「As you take each step, alternately crossing the feet over each other, you will be moving from a position of balance to one that is out of balance. Move your axe before each step, not during the step.」があり、ここでも1歩毎にアックスを打ち替えると言っている。ちなみに126ページには「... pied troisieme,

inconjunction with the axe placed every second step as an anchor,...」があり、129ページには「... with each couple of steps...」「... piolet ancre with each step or every other step,...」とあるので彼の用語ははっきりしており、ジェフは1, 2, 3で共通して述べている「ポジション オブ バランスでアックスを打ち替える」ことを部分的に否定している。

ポジション オブ バランスは存在するのか

このようにポジション オブ バランスは定義がはっきりしない言葉であり、このときにアックスを打ち替えるということも世界的に共通した正しい技術だと言ひ難い。

安全姿勢 (ポジション オブ スィキュア)

キックステップの斜登では緩傾斜以外では山足は斜面が邪魔して、確実な蹴り込みを谷足に比して得難い(このことは後述の「Mountain craft」303ページでヤングが述べていることも参考にできよう)。しかし山足はエッジングし易いのでうまくけり込めたら良い支持脚となる。谷足は蹴り込み易い代わりにエッジングに力を要するので、谷足での片足荷重は脚力の点でも不利で、風、落石、雪崩などのバランスを崩す要因に対して不利となる。この意味で3の後ろ脚(谷足)荷重は不安定である。この点両足荷重=ポジション オブ バランスなら納得できる。しかし山足は蹴り込みにくいと同時にうまく蹴り込めたかどうかは山足片足で立ってみて初めてよいステップであることが証明される。カッティングの場合も山足を上げる時が問題となる。ゆえに山足前の時点では安定したポジションが取れていないと言える。何故通説では山足前なのだろうか。それでは上述のバランスを崩す要因に対して、谷足前より不利になる。すなわち谷足前なら耐風姿勢にはいり易いし、アックスを頂点とする三角形の安定姿勢に移り易いと考えられる。筆者の論点はバランスの善し悪しの観点と趣を異にしているのをこれをポジション オブ スィキュア (安全姿勢)と名付けたのは京都山の会の村西博次氏です。筆者もこの名が気に入る、使わせてもらいます。上手くバランスを取れるか否かは個人差が大きい可能性があるため、バランスのみの議論は避けたいと思います。

キックステップの斜降でも同理由で谷足前の両足荷重がポジション オブ スィキュアとなる。

クランボンの斜登ではどうだろうか。フラット・フットィングのせいで山足は置き辛く、谷足は反対に置き易い上に支持しやすい。上述の三角形の安定姿勢を取り易い谷足前がより有利な姿勢と言える。なぜなら、山足前から山向姿勢になるときはその足を後方へ1歩分移動させ、足の向きを変えて踏み込むことになるが、谷足前の状態なら後足の山足を若干上に、方向を変えて踏み込むことで良い足の位置を作り得る。このようなとっさの動きが要求されるときに所要時間の差は決定的でさえある。

クランボンの斜降も同様に谷足前の姿勢が安全姿勢と言える。

古典に逆上る

このように見てくると、山足前の態勢がポジション オブ バランスであるという説は根拠が薄く、だれか大御所が言い出したことを連綿と踏襲しているように思える。それも正しいことなら実害

3. 論文

は少ないが、誤ったことを踏襲しているなら恐ろしい。

ポジション オブ バランスという言葉がなぜこのように使われているのか、はたして真の意味は何か、後世に伝えるべき正しい技術は何か到我々は心砕かねばならない。前に触れた「Mountain craft」(文献5)は古典として名高い。編者ヤングの記述を引用する。

「Mountain craft」(1920). 299ページには「In cutting diagonal uphill, for men without clows, it is better to make the interval between the steps shorter when the rising step is to be made from the inside foot on to the outside foot. In rising from the outside foot on to the inside foot a long stride can be made in balace, and the interval between steps can be made longer.

In cutting diagonally on the downgrade, the cōntrary is the case. In dropping from the inside foot on to the outside foot a longer stretch can comfortably be made than from the outside foot on to the inside foot.

この前後も読んでみましたが、キックステップについて論じているところが見つかりませんでした。ここではカッティングで斜めに登降する折りの歩幅について述べています。clow (クランボン) 無しの場合の歩幅は、登りでは山足から谷足への歩幅を短めにし、谷足から山足への登りの場合は長めの歩幅がバランス良く取れるので、ステップの幅は長めにできる。

斜め下降の場合はその逆です。山足次いで谷足ではその逆の場合よりも楽に長く足を伸ばすことができる。とありますから、斜め登りの場合は現在の通説どおりではなく、歩幅が長く取れるか短くしか取れないかであって、山足から谷足の場合でも、歩幅を短くする限りバランスを保つことが可能だと解釈できる。斜め下りの場合は上記の文献1-4では全く触れていないが、ここ(文献5)では谷足前の態勢が同じくバランス良く取り得ることを述べている。

結局ヤングの斜登時のバランスは歩幅で決まるのであって、どちらの足が前にあるかではない。

斜降時のバランスは谷足前が良いことを合わせれば、斜登降時のバランスは「谷足前」に統一して差し支えないことになり、その時にアックスを打ち替え得ることになる。

結語

「ポジション オブ バランスでアックスを打ち替える」という教義の根拠がはっきりしていないということと、筆者の持論「谷足前」について述べました。ショイナードやMountaineeringの編者D. GraydonとK. Hansonにヤングから今の説への変遷の歴史を問い合わせしてみようと思っていますが、今のところ筆者の「谷足前でアックスを打ち替える」という主張に変わりはありません。

本稿をまとめるに当たり自らの長い登山実践に比して文献調査の不十分さ、不完全な指導を反省しています。より良い技術の開発、正しい技術指導に向けて十分な調査に基づいた活発な意見交換が必要ではないでしょうか。ご意見をお待ちしています。

(岳僚山の会会員)